

束縛現象から見るロシア語名詞句の統語構造: NP か DP か?

宮内 拓也

東京外国語大学大学院 博士前期課程

miyauchi.takuya.k0@tufs.ac.jp

1. はじめに

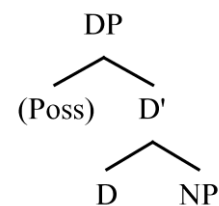
伝統的に *the book* などの名詞句は NP として分析されてきた。Fukui (1986) や Abney (1987) により DP 仮説が提唱されて以来、D を主要部とし、その補部に NP が生起する構造が広く受け入れられている。

しかし、顕在的な冠詞のない言語における名詞句にも DP 仮説を適用すべきかという点については現在でも議論が分かれており、いかなる言語でも DP を投射すると考える「普遍的 DP 仮説(Universal DP Hypothesis)」と DP の投射の有無は言語によると考える「パラメータ化 DP 仮説(Parameterized DP Hypothesis)」が競合している。冠詞のないスラヴ語の名詞句の構造についての立場も、NP であるか¹、DP であるか²で二分されている。

本発表では、Kayne (1994) の理論、Despić (2013) の方法論に基づいて、束縛現象からロシア語の名詞の最大投射は NP であり、DP は投射されないことを示す。また、所有者が名詞に前置される所有表現(所有形容詞、所有代名詞による表現)と後置される表現(属格名詞句による表現)の統語構造の違いが上記の主張を支持することを示す。

2. Despić (2013) に基づくロシア語の名詞句の構造

- (1) a. *Kustrica_i's latest film really disappointed him_i*.³ (2) 一般的に想定される構造
b. *His_i latest film really disappointed Kustrica_i*.



(1a, b) の文法性は、(2) で示す構造を想定することで捉える事が出来る。所有者((1a) の *Kustrica* と(1b) の *his*) は DP 指定部に位置し、目的語((1a) の *him* と(1b) の *Kustrica*) を束縛しない。よって、束縛原理に違反することなく、(1a, b) は文法的となる。しかし、(3) で示す Kayne

¹ 冠詞のないスラヴ語において、DP 仮説を否定するものとしては、Corver (1990), Zlatić (1997), Leko (1999), Trenkic (2004), Bošković (2005, 2009), Petrović (2011) などがある。

² 冠詞のないスラヴ語においても DP 仮説を支持しているものとしては、Veselovská (1995), Progovac (1998), Pereltsvaig (2007), Rutkowski (2002), Bašić (2004), Rutkowski & Maliszewska (2007), Caruso (2012), Bailyn (2012) などが挙げられる。

³ 出典の示されていない例文は、筆者が作成し、ネイティブスピーカーのチェックを受けたものである。

(1994)の c 統御の定義のもとでは、(1a, b)の文法性は予測されない。

- (3) X c-commands Y iff X and Y are categories, X excludes Y and every category that dominates X dominates Y.

「X と Y が共に範疇で、X が Y を排斥し、X を支配する全ての範疇が Y を支配する場合、かつ、その場合に限り、X は Y を c 統御する。」 (Kayne 1994: 16)

- (4) α excludes β if no segment of α dominates β .

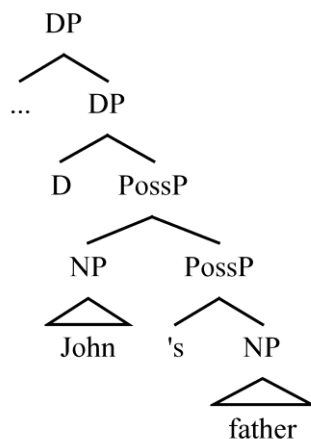
「 α の断片⁴がいずれも β を支配しない場合、 α は β を排斥する。」 (Chomsky 1986: 9)

Kayne (1994)の理論では、指定部は句に付加されていると考える。所有者((1a)の *Kustrica* と(1b)の *his*)は主語の DP の断片に支配されているものの、範疇 DP には支配されない。よって、所有者((1a)の *Kustrica* と(1b)の *his*)はその DP 内から目的語((1a)の *him* と(1b)の *Kustrica*)を c 統御する。このため、それぞれ束縛原理 B と C の違反を起こし、(1a, b)の文は非文であると予測されてしまう。

この問題を避けるために、Kayne (1994)では、(5)のイタリア語の例などをもとに、D が所有者に先行する(6)の構造が提案されている。

- (5) *il mio libro*
the my book
「その私の本」 (Kayne 1994: 26)

- (6) [DP ... [DP D [PossP John [PossP 's [NP father]]]]]⁵



(Despić 2013: 244)

(6)の構造のもとでは、所有者は PossP 指定部に位置しており、空の D を持つ範疇 DP に支配されている。範疇 DP は目的語を支配しないため、所有者は DP 外の要素である目的語を

⁴ 断片(segment)とは、同じラベルでかつ、直接結ばれている節点である。つまり、例えば、[AP₁ [BP b] [AP₂ [A a] [CP c]]]において、AP₁ と AP₂ は共に AP という範疇の断片である。

⁵ Kayne (1994: 26)では *John* と *'s* にはラベルが振られていない。ここでは便宜的に Despić (2013)から引用した。

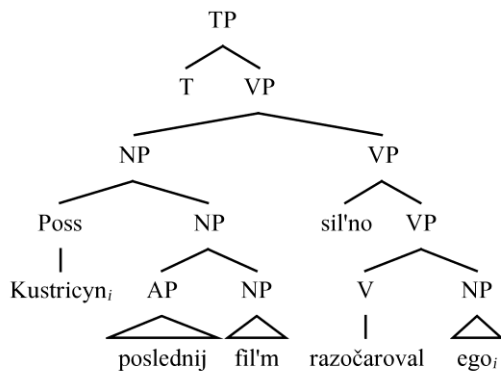
c 統御しない。よって、それぞれ束縛原理 B, C の違反を起こさず, (1a, b)の文法性を正しく予測できる。つまり、この DP は所有者が目的語を c 統御するのを妨げる働きをしているといえる。

ロシア語においても DP が投射されるのであれば、所有者による目的語への c 統御はブロックされ, (1a, b)のような文は文法的になると予測される。しかし、(1a, b)に対応するロシア語の文(7a, b)は非文法的となる。

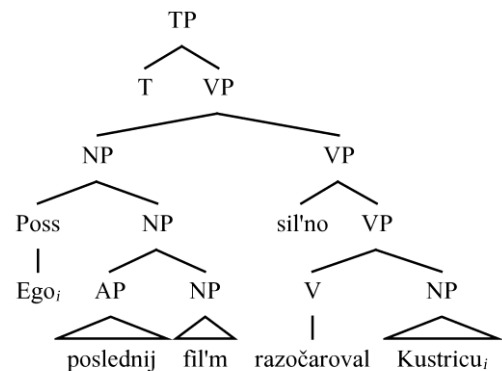
- (7) a. *Кустурицин_i последний фильм сильно его_i разочаровал.⁶
 *Kustricy_n_i poslednij fil'm sil'no ego_i razočaroval.
 Kusturica's latest film really him disappointed
 「クストリツァ_iの最新の映画は彼_iをととてもがっかりさせた。」
- b. *Его_i последний фильм сильно разочаровал Кустурицу_i.
 *Ego_i poslednij fil'm sil'no razočaroval Kustricu_i.
 his latest film really disappointed Kusturica-ACC.
 「彼_iの最新の映画はクストリツァ_iをととてもがっかりさせた。」

(7a, b)の非文法性は、ロシア語において、所有者が目的語を c 統御してしまい、束縛原理 B と C の違反をそれぞれ引き起こしていることを示している。これはそれぞれ以下(8a, b)のように分析できる。

(8) a.⁷



b.



所有者 Poss ((8a)の *Kustricy_n_i* と(8b)の *Ego*)は主語である NP の断片と VP の断片、範疇 TP に支配されている。つまり、所有者 Poss ((8a)の *Kustricy_n_i* と(8b)の *Ego*)を支配する範疇は TP のみとなる。TP は目的語の NP ((8a)の *ego* と(7b)の *Kustricu*)を支配するため、所有者 Poss ((8a)の *Kustricy_n_i* と(8b)の *Ego*)は目的語の NP((8a)の *ego* と(8b)の *Kustricu*)を c 統御する。よって、

⁶ ロシア語の例文については、ロシア文字による表記の下、グロスの上にラテン文字の転写を記す。ロシア文字の転写は以下の通り：A=A, Б=B, В=V, Г=G, Д=D, Е=E, Ё=E, Ж=Ž, З=Z, И=I, Ы=J, К=K, Л=L, М=M, Н=N, О=O, П=P, Р=R, С=S, Т=T, У=U, Ф=F, Х=X, Ц=C, Ч=Č, Ш=Š, Щ=Šč, Ъ=”, Ы=Y, Ь=’, Э=É, Ю=Ju, Я=Ja.

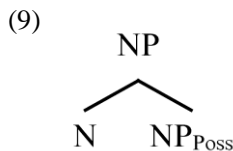
⁷ (8)では VP 指定部に主語がある基底の構造が示されているが、これは単にスペースの節約のためであり、特に他意はない。また、(7a)は、目的語の NP がスクランプリングによって移動し、SOV の語順になっている。しかし、今回の議論には関係がないので、(8a)では移動を起こしていない樹形図を示してある。

それぞれ束縛原理 B と C に違反し、非文となる。

もし DP のレイヤーが存在していれば、それが所有者 Poss による目的語の NP に対する c 統御を妨げるため、束縛原理 B と C の違反は起こらず、(7)のような文は(1)と同様に文法的となるはずである。しかし、実際には、英語の(1)は文法的であるのに対し、ロシア語の(7)は非文となる。よって、ロシア語においては英語と異なり、DP が投射されていないといえる⁸。

3. 属格による後置修飾の場合

ロシア語では、上記の(7)の主語のような所有形容詞⁹、所有代名詞¹⁰を被所有者に前置する所有表現の他にも属格の名詞句を被所有者に後置する所有表現がある。(9)で示すように、ロシア語学では一般的に属格の所有者は主要部名詞の補部に生起するとされている(Franks 1995: 38; Bailyn 2012: 214¹¹; Mitrenina et al. 2012: 84)。



⁸ この議論はロシア語においても英語と同様に束縛原理が働くことが前提となっている。つまり、もし束縛原理がロシア語において有効に働かないのであれば、非文法性の原因は名詞句の構造ではなく、束縛のほうにあるかもしれないということである。しかし、以下の(i), (ii)の例からも分かるように、一般にロシア語においても束縛原理は有効に機能する。

- | | |
|--|--|
| <p>(i) a. Петя_i любит себя_{i/*j}
 Петя_i ljubit sebja_{i/*j}.
 Peter loves himself
 「ペーター_iは自分_{i/*j}を愛している。」</p> | <p>b. Петя_i любит его_{*ij}
 Петя_i ljubit ego_{*ij}.
 Peter loves him
 「ペーター_iは彼_{*ij}を愛している。」</p> |
| <p>(ii) Он_i думает, что Маша любит Петю_{*ij}
 Он_i dumaet, čto Maša ljubit Petju_{*ij}.
 he think that Masha loves Perter
 「彼_iはマーシャがペーターを_{*ij}を愛していると思っている。」</p> | |

また、ロシア語における束縛原理の有効性は Bailyn (2012)などにも述べられている。

⁹ 所有形容詞とは(7a)の *Kustricyn*「クストリツァの」のような、所有、帰属関係を表すカテゴリーである。男性名詞と女性名詞から比較的自由に形成される。通常の形容詞の語尾と異なる語尾を持っている点特徴的である。また、その形態法も通常の形容詞とは異なっている。

¹⁰ 所有代名詞とは(7b)の *Ego*「彼の」のような、所有、帰属関係を表すカテゴリーである。人称代名詞との対応がある。

¹¹ 正確に言うと、Bailyn (2012)は(9)の構造は想定していない。Bailyn (2012)によれば、名詞を修飾する属格(Adnominal Genitive)は被修飾語である名詞句の補部に位置する QP の補部に位置するとされ、以下の構造が想定されている。

- (iii) [NP [N] [QP [Q] [NP_{GEN}]]]

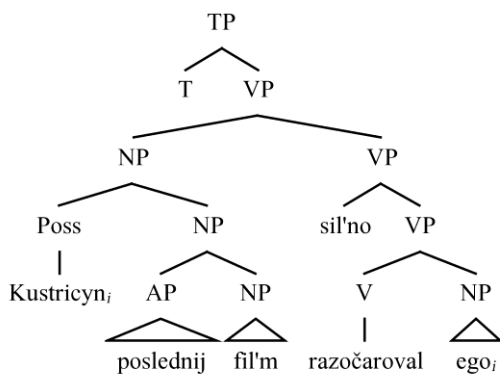
しかしながら、被所有者の NP 以下の位置に所有者の属格名詞句が生起するのであれば、今回の議論には影響を与えない。

(10a)は所有者が主要部名詞に対して前置される，所有形容詞を用いた所有表現が主語になっており，(10b)は所有者が主要部名詞に対して後置される，属格の名詞句を用いた所有表現が主語になっている。

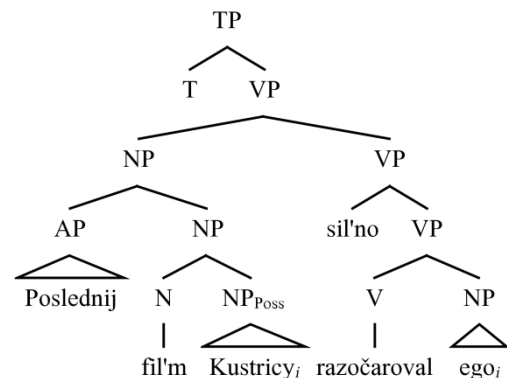
- (10) a. (=7a) *Кустурицин_i последний фильм сильно его_i разочаровал.
 *Kustricyn_i poslednij fil'm sil'no ego_i razočaroval.
 Kusturica's latest film really him disappointed
- b. Последний фильм Кустурицы_i сильно его_i разочаровал.
 Poslednij fil'm Kustricy_i sil'no ego_i razočaroval.
 latest film Kusturica-GEN. really him disappointed
- 「クストリツァ_iの最新の映画は彼_iをとてものがっかりさせた。」

所有者が前置される(10a)は非文法的となるのに対し，所有者が後置される(10b)は文法的である。これは以下(11a, b)のように分析できる。

(11) a.¹²(=8a)



b.¹³



(11a)では，所有者 Poss (*Kustricyn*)は主語である NP の断片と VP の断片，範疇 TP に支配されている。つまり，所有者 Poss (*Kustricyn*)を支配する範疇は TP のみとなる。TP は目的語の NP (*ego*)を支配するため，所有者 Poss (*Kustricyn*)は NP (*ego*)を c 統御する。よって束縛原理 B に違反し，非文となる。それに対し，(11b)では，所有者 NP_{Poss} (*Kustricy*)は範疇 NP と VP の断片，範疇 TP に支配されている。よって，所有者 NP_{Poss} (*Kustricy*)を支配する範疇は NP と TP である。主語の NP は目的語の NP (*ego*)を支配しないため，所有者 NP_{Poss} (*Kustricy*)は NP (*ego*)を c 統御しない。そのため，束縛原理 B に違反しせず，文法的となる。これはつまり，主語の範疇 NP が所有者 NP_{Poss} (*Kustricy*)を支配することで，目的語の NP (*ego*)に対する c 統御をブロックしているといえる。(10a, b)それぞれの文法性のコントラストは 2. で示された主張を支持する結果となっている。

また，(11a)の所有者(*Kustricyn*)のラベル(Poss)と(11b)の所有者(*Kustricy*)のラベル(NP_{Poss})は

¹² (11)では VP 指定部に主語がある基底の構造が示されているが，これは単にスペースの節約のためであり，特に他意はない。

¹³ (10b)は，目的語の NP がスクランブリングによって移動し，SOV の語順になっている。しかし，今回の議論には関係がないので，(11b)では移動を起こしていない樹形図を示してある。

異なっているが、これは恣意的なものではない。(11b)の所有者(*Kustricy*)は(12)に示すように完全な名詞句と置換可能である。

(12) Последний фильм этого режиссёра_i сильно его_i разочаровал.
Poslednij fil'm éтого režissera_i sil'no ego_i razočaroval.
latest film this-director-GEN. really him disappointed

「この監督_iの最新の映画は彼_iをとてものがっかりさせた。」

(12)の *éтого režissera*「この監督」が完全な名詞句を形成することは疑いようがないため、(11b)の所有者(*Kustricy*)も完全な名詞句を形成しているといえる。それに対し、(11a)の所有者(*Kustricyn*)は完全な名詞句を形成しているとは言い難い。なぜならば、ロシア語においては、所有形容詞は2語以上の名詞句からは形成され得ない。つまり、2語以上で表現される所有者は被所有者の名詞に前置することができない。所有形容詞は名詞句の構成要素の1つでしかないと考えられる¹⁴。

4. おわりに：まとめと今後の課題

本発表ではロシア語の名詞句はDPではなく、NPであることを示した。(7)の非文法性は、名詞句がDPを投射するならば説明がつかない。一般にロシア語においても束縛原理は有効に働くため、非文法性の原因は束縛ではなく名詞句の構造にあるといえる。Kayne (1994)の理論を用いて検証すると、DPを投射しないことにより、所有者による目的語へのc統御が許される。その結果、束縛原理に違反することで非文となると説明できる。また、(10a, b)の文法性のコントラストは上記の議論の裏付けとなり得る。所有形容詞を用いた所有表現が主語になる場合、上記のように所有者が目的語をc統御し、束縛原理に違反することで非文となる。属格を用いた所有表現が主語になる場合は、所有者が目的語を束縛せず、文法的となる。これらの文法性は上記の議論と所有者の統語的位置から自然に予測され得る。よって、ロシア語においてDPは投射していないと結論付けられる。これは普遍的DP仮説ではなく、パラメーター化DP仮説が妥当であることを示している。

本発表では記述的な観点からロシア語の名詞句の最大投射はDPでなく、NPであることを論じたが、今後はその理論的妥当性についても検証していきたい。

¹⁴ 所有形容詞の統語的地位については今後考えていかなければならない問題である。

引用文献

- Abney, S. P. (1987) *The English Noun Phrase in Its Sentential Aspect*, Ph.D. Dissertation, MIT.
- Bailyn, J. (2012) *The Syntax of Russian*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Bašić, M. (2004) *Nominal Subextractions and the Structure of NPs in Serbian and English*, MA Thesis, University of Tromsø.
- Bošković, Ž. (2005) “On the Locality of Left Branch Extraction and the Structure of NP”, *Studia Linguistica*, 59(1), 1-45.
- _____, (2009) “More on the No-DP Analysis of Article-Less Languages”, *Studia Lingua*, 63(2), 187-203.
- Caruso, Đ. Ž. (2012) *The Syntax of Nominal Expressions in Articleless Languages: A Split DP-Analysis of Croatian Nouns*, Ph.D. Dissertation, University of Stuttgart.
- Chomsky, N. (1986). *Barriers*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Corver, N. (1990) *The Syntax of Left Branch Extractions*, Ph.D. Dissertation, Tilburg University.
- Despić, M. (2013) “On the Structure of NP in Serbo-Croatian: Evidence from Binding”, *Linguistic Inquiry*, 44, 239-270.
- Franks, S. (1995) *Parameters of Slavic Morphosyntax*, New York: Oxford University Press.
- Fukui, N. (1986) *A Theory of Category Projection and Its Applications*, Ph.D. Dissertation, MIT.
- Kayne, R. S. (1994) *The Antisymmetry of Syntax*, Cambridge, MA: MIT Press.
- Mitrenina, O.V., E.E. Romanova, N.A. Sljusar’ (2012) *Vvedenie v Generativnuju Grammatiku*, Moskow: Knižnyj Dom “LIBROKOM”.
- Leko, N. (1999) “Functional Categories and the Structure of the DP in Bosnian”, in M. Dimitrova-Vulchanova and L. Hellan (eds.) *Topics in South Slavic Syntax and Semantics* Amsterdam: John Benjamins, 229-252.
- Pereltsvaig, A. (2007) “The Universality of DP: A View from Russian”, *Studia Lingua*, 61(1), 59-94.
- Petrović, B. (2011) “The DP Category in Articleless Slavic Languages” *Jezikoslovlje*, 12(2), 211–228
- Progovac, L. (1998) “Determiner Phrase in a Language without Determiners”, *Journal of Linguistics*, 34, 165-179.
- Rutkowski, P. (2002) “Noun / Pronoun Asymmetries: Evidence in Support of the DP Hypothesis in Polish”, *Jezikoslovlje*, 3(1-2), 159-170.
- Rutkowski, P., H. Maliszewska, (2007) “On Prepositional Phrases inside Numeral Expressions in Polish”, *Lingua*, 117, 784-813.
- Trenkic, D. (2004) “Definiteness in Serbian / Croatian / Bosnian and Some Implications for the General Structure of the Nominal Phrase”, *Lingua*, 114, 1401-1427.
- Veselovská, L. (1995) *Phrasal Movement and X-Morphology: Word Order Parallels in Czech and English Nominal and Verbal Projections*, Ph.D. Dissertation, Palacký University.
- Zlatić, L. (1997) *The Structure of Serbian Noun Phrase*, Ph.D. Dissertation, University of Texas at Austin.